—Foreword—

ファーマシューティカル・ケア実践のためのクリニカル・スキル

吉山友二

Clinical Skills for Pharmaceutical Care

Yuji YOSHIYAMA
Division of Clinical Pharmacy, Kyoritsu University of Pharmacy, 1–5–30 Shibakoen, Minato-ku, Tokyo 105–8512, Japan

医薬品は患者の疾患の治療や予防などに多大な貢献をしており，医療の中に占める薬物療法の位置付けは極めて大きいものです．これら医薬品は本来の作用と効果を最大限に発揮し，副作用を最小限に抑えて，患者の健康回復に上手に利用して初めて価値を生み出せるものでしょう．「病気を診て人を診ず」との反省から，「全人的医療」の実践を目指して新しく医師臨床研修制度が必修化され，基本的な診療能力の修得によるより「患者中心の医療」が展開されつつあります．薬剤師の仕事も薬物中心から患者中心のチーム医療へとパラダイム・シフトしてきました．ここにファーマシューティカル・ケアの実践の場があります．薬剤師は，患者との信頼関係を築いて薬の専門家としてファーマシューティカル・ケアを実践する責任を担っているのです．患者の安全性や健康増進を得るための薬物療法が適正に展開されるように監視する責任を有しています．残念ながら副作用などの問題が今日も発生しているかも知れません．20 種類もの薬は，真にその患者に必要だったのでしょうか？患者は薬剤師によるファーマシューティカル・ケアの実践を強く望んでいます．薬の専門家としてファーマシューティカル・ケアを実践した患者群と対照群との比較では，薬物関連の問題を見い出すことができた比率が 7.5：1，さらにその問題の解決に関与した比率は 8.1：1 でした．本誌上シンポジウム「ファーマシューティカル・ケア実践のためのクリニカル・スキル」の焦点は，ファーマシューティカル・ケアを実践するためのクリニカル・スキルについて関連知識を情報提供し，薬学会がスキル面から後押しすることにあります．各総説の概要を以下に示します．

1）「薬物治療マネジメント：薬科大学で学生教育に携わる者として」では，越前宏俊氏（明治薬科大学薬物治療学教室）より，平成 18 年度からの薬剤師養成教育 6 年制化に際し，日本のファーマシューティカル・ケアを支えるクリニカル・スキルの養成教育に薬科大学で携わる教育者の一員として問題点を議論されています．薬剤師に社会が求めるもの，薬物治療マネジメントを行う者としての薬剤師像の確立，医療の場で薬剤師が果たす責務，ファーマシューティカル・ケアにおける薬剤師能力の強化点などについての概説です．今後，薬剤師が医療においてファーマシューティカル・ケアを確立し，薬物治療における患者擁護者として定着することが大いに期待されます．

2）「血清蛋白結合に関連した臨床検査値の解釈」では，髙村徳人氏，徳永　仁氏，有森和彦氏（九州保健福祉大学薬学部臨床薬学第二講座，宮崎大学医学部附属病院薬剤部）らより，薬物の血清蛋白結合とそれに着目することの意義及び蛋白結合に影響を及ぼす臨床検査値とその影響を薬学的に解釈するための薬学的分布診断法について，臨床経験も含めて概説されています．薬学的分布診断法が薬剤師の技術向上に有用であることが提言されており，薬学的分布診断法は本来医学的な観点から見出された臨床検査値を薬学的（蛋白結合的）に解釈するための方法であることが理解できます．今後，薬剤師が行う薬学的分布診断に基づく蛋白結合置換術（薬術：薬学の研究成果を臨床で耐え得る薬剤師技術にまで高めたもの）を展開するための貴重な内容です．

共立薬科大学臨床薬学講座（〒105–8512 東京都港区芝公園 1–5–30）
e-mail: yoshiyama-yj@kyoritsu-ph.ac.jp
日本薬学会第 126 年会シンポジウム S12 序文

3）「コミュニケーション・スキル」では，小手川　勤氏（大分大学医学部臨床薬理学教室）より，良好なコミュニケーションに基づく患者と医療従事者との信頼関係の重要性が指摘されました．コミュニケーション・スキルを向上させる目的，医療人が身に付けておくコミュニケーション・スキル，患者さんに分かり易く話すスキル，現場で役に立つ支援的面接などが魅力的に解説されています．患者の苦しみ，不安を察し，配慮しようとすれば，それは自然な形で言葉，態度に現れ，傾聴・共感という医療コミュニケーションの基本につながると思われます．

4）「薬歴スキルとその応用」では，木村　健氏（近畿大学薬学部実務教育部門）より，病院薬剤師における薬剤管理指導記録や保険薬剤師における薬歴は，具体的に薬剤師の活動の成果を示すものとして重要であることが紹介されています．今後益々記録が重要視される中，より質の高い記録を作成できるスキルを身に付けるため，医療現場の薬剤師と6年制を迎える教育現場が協力し，その体系を構築していくことが強く求められます．これからの薬剤師の記録に求められるものは，系統だった患者管理を実践するための記録，チーム医療の中で情報を共有化するための記録，患者管理において薬剤師の役割を明確にするための記録，薬剤師の問題解決能力の教育に利用できる記録，患者への開示も含め法的証拠となり得る記録であることが理解できます．

5）「薬物治療モニタリング」では，伊藤忠明氏，内田ゆみ子氏，田村宏美氏，長谷部　忍氏，五十嵐正博氏，林　昌洋氏（虎の門病院薬剤部）らより，ファーマシューティカル・ケアを実践する上で薬物の有効性及び安全性を薬剤師の観点からモニタリングすることは，臨床薬剤師にとって重要な業務であり，そのためのスキルの標準化は業務にとって不可欠であることが提言されています．MRSA感染症患者などに対してバンコマイシンの薬物治療モニタリングをするためのスキルの標準化について紹介されています．また，注射用抗がん剤を例に臨床薬剤師の薬物治療モニタリング・スキルが魅力的に紹介されています．有効性を担保したがん化学療法を実施するため，医師，薬剤師が参加するレジメン評価委員会で設定された基準を基に，薬剤師が担う有効性と安全性のモニタリングに関して必要なスキルが紹介されています．

本誌上シンポジウムは，2006年3月に開催されました日本薬学会第126年会でのシンポジウム「ファーマシューティカル・ケア実践のためのクリニカル・スキル」での発表を元に，シンポジストの先生方に最新の知見をまとめて頂きました．シンポジストですが誌上シンポジウムにご参加頂けませんでした基調講演されました相羽惠介氏（慈恵医大附属病院・臨床腫瘍部）につきましても，大変興味深い内容でしたので概要を記します．従来，ややもすると「カルテ」は医師のためのメモ，覚え書き程度のものでしかなかったことを指摘されています．今日，「カルテ」の記載者は医師のみに留まらず，看護師，薬剤師を始め全医療者と考えられるに至っているとエールを送って下さいました．「医はサイエンスに支えられたアートである」のアート（術と道，医の心）をいかに「カルテ」に残すかは，行間を含めて人間医学，人間医療の源であることを認識したいと思います．

今後，よりよきクリニカル・スキルを活用し，医薬品適正使用の実践をめざしたいものです．本シンポジウムでの講演内容を，ファーマシューティカル・ケアの実践に応用することが薬学関係者の腕の見せ所と確信しています．